



田耕小では校内の至るところに児童作の俳句を掲示している。
「みんな、なかなか上手。将来楽しみです」

岡さんは菊舎の生き字引きのよう。一字庵十一世を名乗るのも運命だったようです。

その場に顕彰会会員で香道師範の吉村ひとみさんもおられ、「岡会長がたとえば東京へ行かれるとき、『江戸へのぼつてくる』と真顔で言うんです。それくらい、菊舎にのめり込んでいらっしやいま

す」とのこと。わかります。江戸時代の封建社会にあっても「風雅に老若男女貴賤都鄙の差別なし」という俳諧の道を、「信」の一字で生き抜いた菊舎の心に通じているのでしよう。

小学生の俳句名人たちと面会

菊舎の遺志がそこかしこに刻まれている田耕は、小学校でも俳句づくりが盛んなようです。岡さんに連れられ、田耕小学校を訪ねると、グラウンドの一角、菊舎句碑（故郷や名もおもひだす草の花）の前に、全校児童三十四人が集合していました。手に手に短冊を持っています。青空の下で、自作俳句の即席発表会となりました。校舎に入ると、玄関にも廊下の壁にも俳句がいっぱい。毎月、児童たちが投句した俳句を、学年ごとに内田恒生校長先生が選ぶというやり方が確立しているようです。

俳句を生きるためには、日頃から自分の中の俳句の畑を耕し続けなければなりません。その点、田耕小の子どもたちはスタートが早く、環境にも恵まれていま

す。地名までも「田耕」とぴったり。二〇一一年度から全国の小学校で短詩型の授業が強化されるのですが、田耕小は先駆的で頼もしく思いました。ただ、さつきグラウンドで、ある女の子に「菊舎好き？」って聞くと、「ビミョー…」という答えが返ってきたのは、おかしかった。

そのことを、今日の宿までの車中で、同行の編集者Fさんに話すと、「そういう裏話の方が面白いですよ」と急に乗り気になり、「菊舎醜婦説」を持ち出してきました。

「なぜですか？」

「長い一人旅で、ちっとも言い寄られた形跡がないからです」

ちよつとひどい話ですが、真偽のほどは後日、岡会長に教えていただくと思っています。「まあ、それはいいとして」と、Fさんは自分が言いだした話を自分で引き取り、今夜のホテル西長門リゾートの楽しみ方について、ひとくさり。「そのためには、浴衣姿をご披露いただければ」という結論はよくわかりませんが、確かに海のすぐそばに建つ、リラックスできそうなホテルでした。

う器の十七音の宇宙を巡っていけばこ
その普遍性なのかもしれません。そんな
つながりを、菊舎尼の導きによって、今
日もどこかで発見できそうです。

ちよつとした街並みに入り、ふと左手
を見ると、石の太鼓橋とその向こうに山
門がありました。田耕の妙久寺です。こ
こが菊舎の庵号「一字庵」の十一世で「菊
舎顕彰会」会長でいらっしゃる岡昌子さ
んのお住まいです。岡さんはとても快活
な方。それなら私も引けをとらず、お座
敷に通されるか通されないかのうちに、
旧知どうしのように、おしゃべりを始め
ていました。

「菊舎は美濃派の朝暮園傘狂の門に入り、
まず、越前く越後く奥羽と、『奥の細道』
とは逆コースをたどる大行脚に出ました。
その後も長崎や阿蘇など九州各地、京都・
奈良・大坂、中山道から木曾路などを巡
歴。まさに生涯を旅に暮らした俳人、い
や文人です。というのも……」

和歌・漢詩・書画・弹琴・茶道など、
菊舎尼はあらゆる芸に通じていたのです。
今、目の前にある床の間にも菊舎直筆の
掛け軸が掛かっています。それにしても、



自作の句〈花がちり衣がえす
る桜かな〉を発表する4年生
の岡田萌香さん。

黛さんの直接指導で大張り切りの下関市立田耕小学校の児童たち。

